

Ⅶ. 抗癌剤治療について

1. 抗癌剤とは？

癌（悪性腫瘍）に対する治療の1つである、化学療法に用いられる薬剤のことです。癌に対する薬は現在100種類前後ありますが、癌の種類によって使う薬は異なります。1種類で使用したり、いくつかを組み合わせで使用することもあります。

産婦人科では、子宮頸癌・子宮体癌・卵巣癌（頻度：卵巣癌＞子宮体癌＞子宮頸癌）などに使用されます。

2. 抗癌剤はどのように作用するのですか？

癌細胞は、放っておくと自分で勝手に分裂を繰り返し増殖してしまいます。抗癌剤はがん細胞の中に入ると、分裂に必要な過程を抑制したり、細胞を破壊することで増殖をくい止めます。抗癌剤はそれぞれ癌に対する作用が異なります。その違いでいくつかの種類に分類され、うまく組み合わせで使用することで効果が高まります。

抗癌剤は、分裂の活発な細胞に作用するという特徴があります。癌以外でも、分裂の活発な正常細胞にも作用してしまいます。このために副作用がおこることがあります。骨髄細胞（血液をつくります）・毛根の細胞・腸の細胞などに作用することによって、骨髄抑制・脱毛・吐気などが生じることがあります。抗癌剤の種類により、副作用の種類や程度が異なります。

3. 抗癌剤の種類と副作用

産婦人科で主に用いられる抗癌剤の組み合わせと副作用について説明します。

化学療法の種類	主な副作用
①TC療法(パクリタキセル+カルボプラチン) 対象疾患: 卵巣癌、子宮頸癌、子宮体癌	骨髄抑制・吐気・脱毛・末梢神経障害・関節痛・ 筋肉痛・肝障害・心障害・アレルギー反応
②CPT-P療法(イリノテカン+シスプラチン) 対象疾患: 卵巣癌、子宮頸癌	骨髄抑制・吐気・脱毛・神経障害・ 腎障害・下痢
③DC療法(ドセタキセル+カルボプラチン) 対象疾患: 卵巣癌、子宮体癌	骨髄抑制・吐気・脱毛・末梢神経障害・口内炎 ・浮腫・皮膚障害・心障害・アレルギー反応
④IEP療法 (イフォスファミド+エピルビシン+シスプラチン) 対象疾患: 卵巣癌、子宮体癌、子宮肉腫	骨髄抑制・吐気・脱毛・出血性膀胱炎・ 卵巣機能不全・心障害・神経障害・ 腎障害・血管漏出時の皮膚毒性
⑤ドキシル療法(ドキシソルビシン塩酸塩) 対象疾患: 再発卵巣癌	骨髄抑制・吐気・脱毛・口内炎・ 心障害・手足症候群・急性反応

4. 抗癌剤治療はどのように行うのですか？

婦人科癌で最も使用頻度の高い、TC療法について説明します。

原則として、外来通院治療室での治療となります。はじめての抗癌剤治療を行う場合は、薬剤によるアレルギー反応や副作用がどの程度おこるのかがわからないため、慎重に対応しています。約2週間後に外来受診していただき、血液検査を行います。検査結果と全身状態を考慮して、次回の治療日程を相談いたします。

3～4週間に1回の頻度で治療は行われます。2回目以降の治療は、これを3～6回繰り返す方法が標準的です。

5. 抗癌剤の副作用対策

(1)骨髄抑制

骨髄は血液をつくる場所です。血液中の主な成分は白血球・赤血球・血小板です。

抗癌剤は骨髄の働きを弱くするため、これらの成分が少なくなります。

白血球減少は、感染を起こしやすくなります。赤血球減少は貧血になります。

血小板減少は、出血を起こしやすくなります。白血球減少には白血球を増やす注射、

貧血には赤血球輸血、血小板減少には血小板輸血が必要になることがあります。

(2)悪心・嘔吐

抗癌剤を投与して数時間後～数日後に悪心・嘔吐が出現する場合があります。抗癌剤投与前に吐気止めの点滴をします。投与翌日から内服薬を処方します。

(3)脱毛

抗癌剤投与後2～3週間で少しずつ脱毛が始まります。効果的な予防法はありません。

ほとんどの方は、治療終了後数ヶ月たつと少しずつ髪の毛がもどってきます。

(4)神経障害

手足の痺れが起こる抗癌剤があります。治療の回数が増えると痺れは強くなって

いきます。漢方薬やビタミン剤を内服して症状が軽減する場合があります。

(5)筋肉痛・関節痛

全身の筋肉痛や関節痛を生じる抗癌剤があります。消炎鎮痛剤や漢方薬を内服して

症状が軽減する場合があります。

(6)口内炎

口内炎が悪化すると食事がしにくくなります。うがい液での口腔内洗浄や、ビタミン剤の内服が効果的です。

(8)内臓障害

・肝障害：定期的に血液検査を行い、肝機能を評価します。

・心障害：不整脈や心不全などが生じる場合があります。

・腎障害：大量の点滴を投与し、尿をたくさん出るようにして予防します。

※おわかりにならないことがありましたら、担当医にお尋ねください。